「アメリカ」の影

F・コッポラの「地獄の黙示録」は、ベトナムの奥地にまで行ってしまった一軍人が、そこに王国を作り神になる話だが、ここには、アメリカにおけるマッカーサー経験ともいうべきものが影を落としている。マッカーサーは数度の本国帰還要請に応じなかった。彼は十五年もの間アメリカに還らず、その最後の五年間は極東の孤島で王と

加藤典洋

「アメリカ」の影

F・コッポラの『地獄の黙示録』は、ベトナムの奥地にまで行ってしまった一軍人が、そこに王国を作り神になる話だが、ここには、アメリカにおけるマッカーサー経験ともいうべきものが影を落としている。マッカーサーは敗戦の本国帰還要請に応じなかった。彼は十五年もの間アメリカに還らず、その最後の五年間は極東の孤島で王と

加藤典洋

河出書房新社

The Shadow of the America
by Norihiro Kato

アメリカの影

加藤典洋 著

©1985

一九八五年四月二〇日 初版印刷
一九八五年四月三〇日 初版発行

河出書房新社
発行人 清水勝
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
TEL(四〇四)一二〇一(営業)
(四〇四)八六一一(編集)
振替 (東京) 〇―一〇八〇二

印刷 東洋印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

装幀 戸田ツトム

Printed in Japan
ISBN4-309-00404-0

目次

「アメリカ」の影——高度成長下の文学　5
『なんとなく、クリスタル』から「現代文学の倫理」へ　7
『一九四六年憲法——その拘束』から『抱擁家族』、『成熟と喪失』へ　39
ふたたび江藤淳、そして『夕べの雲』、『苦海浄土』　77
崩壊と受苦——あるいはフロンティアの消滅　131
戦後再見——天皇・原爆・無条件降伏　169
あとがき　323

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

アメリカの影

「アメリカ」の影——高度成長下の文学

『なんとなく、クリスタル』から「現代文学の倫理」へ

1

江藤淳が『なんとなく、クリスタル』をほめている（「文藝」一九八〇年十二月号）。以前村上龍が、『限りなく透明に近いブルー』を書いた時（「群像」一九七六年六月号）これを全面的に否定したことを思い出して、前者をほめ、後者をけなす江藤の評価軸はどのようなものだろうと感じたのだったが、いつかそのことを忘れてしまっていた。

こんど、そのことを思い出すかたちでこの一年前のベストセラー小説を読んでみたのだが、この田中康夫の小説は、ぼくには面白かった。

そのきっかけは、「海」四月号にのった吉本隆明と江藤淳の対談「現代文学の倫理」である。

この対談もやはり、ぼくには面白かった。

江藤淳のここでのもののいい方は、次のようなぐあいだ。

吉本はまず、江藤にたいして、その占領研究の仕事は、とてもアクチュアルではあるけれど、「こういうことは政治担当者や政府の権力者が、ちょっと違う方針を出してしまったら、すぐに変わってしまうものなんじゃないか」、「つまり江藤淳ともあろう人が、(……)こんなにつまらんことにどうしてエネルギーを割くんだろう」、「知識人というのは、もっと偉いんじゃないか、もっと永続的なものなんじゃないか」と尋ねるのだが、その答えである。

うかがっていて、吉本さんもずいぶん楽観的だなと思いましたね。吉本さんは私の仕事についてつまらぬことにかまけていると言われますが、私のいまやっていることはなんら政策科学的な提言などではありませんよ。そんなものに熱中できるわけがない。私はこれが私にとっての文学だからやっているのです。そうでなければ、こんなに身を入れてやりはしませんよ。ぼくは結局自分が言葉によって生きている人間であることを、日夜痛感しています。だからこそ、言葉を拘束しているものの正体を見定めたいのです。

もう少し引いてみよう。

それからいま吉本さんは知識人というものはもっと偉いものなんだといわれたけれども、ぼくは、知識人が果してそんなに偉いものかどうかという点については、もともと疑問を抱

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

いているのです。(……)もしあなたが偉いとお思いだとすれば、それは戦後の日本にすら知識人が偉くなり得る条件が備わっていると、幸福にも信じておられるというだけのことであって、失礼ながら私は幻想だと思います。そんなものはないんだと……。そういう条件が根こそぎになっているのが、戦後日本の言語空間の特徴です。偉そうなふりをしても、言葉の意味がそのはじから消えてしまう。キツネにもらった小判のような言葉を操って、どうして文学ができるのだろう、そういう文学者が、どうして偉いことになるのだろうと、首を傾けないわけにはいかない。だからこそ、意味のある言葉、只の記号ではない言葉を、どうやって取り戻せるかと私は考えている。

ここで江藤が「私の仕事」といっているものについて、ぼくはよく知っているわけではない。ここ三年ほど日本を留守にしていたので、ここで問題になっている彼の『ワシントン風の便り』、『一九四六年憲法——その拘束』、『落葉の掃き寄せ』のうちの一部を、発表時に読んだだけだ。三日程前の朝日新聞がこれを取りあげて、これらの著作で「現在の憲法を根底的に批判し、占領下検閲のもたらした欺瞞がいまなお続いていると主張する江藤淳」(「朝日新聞」一九八二年四月三日)と紹介している。いずれはそんなものだろうと思う。

しかし江藤の仕事には基本的なわかりにくさがある。江藤は、「戦後」の「閉ざされた言語空間」にいらだつ。戦後になって得られた自由は「キツネにもらった小判」のようなものだ。「意

味のある言葉、只の記号ではない言葉を、どうやって取り戻せるか」それを彼は考えているというのだが、いったいそれではどうしろというのか。彼のこの現実改革の具体的な手順、シナリオはどのようなものだというのかが、わからない。

彼はこれが彼にとっての文学なのだという。しかし、一方では彼は、自衛隊法の改正を求め、改憲をめざす、「日本を守る国民会議」という運動の呼びかけ人に名を連ねている。

これが彼の文学なのか。

そうではないだろう。しかしこのあたりに彼の弁舌をもってしてもはっきりしてこない江藤淳の暗がりがあることは、否めない。

実をいえば、ぼくはもうこれらの著作を読んでみようという気にはならなかった。ただこの江藤のもの言いをつつんでいる暗さ、その暗い情熱に圧倒されたのだ。

なぜ彼のいい方は、こんなふうに追いつめられた、せっぱつまったものになっているのか。

なぜ日本の知識人はある年齢に達し、ある臨界点に近づくと、——何らかの方法を考案しない限り——江藤のように暗い情熱のとりこになるか、「隠居」して現実からオリるかしかなくなるのか。

ここには何か非常にはっきりした自明の前提があって、それは余りに自明すぎて誰もそこまで溯って考えようとはしない、しかしそれは葛藤の網目のように、そこから脱れようとすると、そのような者にたいしてだけそれをさまたげるものとして現われてくるというようなことは、ない

のだろうか。

江藤の吉本との対談は、面白かった。それはぼくに、『なんとなく、クリスタル』を読んでみる気にさせる程にはアッピールした。この小説はそれまで読んでいなかったのだが、この小説の風評と――その大部分はお話しにならないという風だった――、江藤がこれを激賞したというハナシだけは、ぼくの耳にも届いていたからだ。いったい、この「悲愴」で「暗い」情熱と、あっけらかんとした『なんとなく、クリスタル』とは、どのようにつながるのか。

また、この『なんとなく、クリスタル』肯定と、『限りなく透明に近いブルー』否定の底にあるのは、どのような考え方なのか。

『なんとなく、クリスタル』を読んでみて、ここには一つの問題の入口があると感じた。ぼくの考えでは、この小説には何か、江藤のもっている「弱さ」を限りなく拡大したようなところがある。限りなく拡大した、その分江藤よりその「弱さ」を生きてしまったというようなところがある。江藤の肯定は、文学畑ではなはだしく不評だった反面とにかく八十万人もの読者をもったこのベストセラー小説の本質に、じかに触れていると思う。ところでまたこの肯定された小説は、江藤の「思想」と「文学」の深層まで、なにかとどいているようにも思われるのである。

『なんとなく、クリスタル』。とにかく評判の悪い小説だ。ぼくの知り合いで、これを読んだというヒトは皆無だった――。

津村喬はこう書いている。

「田中康夫の『なんとなく、クリスタル』の批判をしておく。あれがファシズムだと言いたてるつもりはもとよりない。今日の消費システムについて考える入口になりそうだというだけだ。

読んでみると一時間もかからない。何のストーリーもない。女子大生がある日退屈して前日ディスコで知り合った男とねてみるがやっぱり退屈で、同棲してる男が仕事から帰ってきてねたらやっぱりよかった、というだけの話だ。何の発展もなく、心理描写もない。それがなぜ評判になったかというと、ほとんど数行おきに有名ブランドを並べて趣味のよさ（？）を誇示したところが、今の若い都会派の風俗生態を表しているということなのだろう」。（「現代日本にありうるファシズムは何か」「思想の科学」一九八一年五月号）

津村は、だが田中康夫は主人公たちがなぜクリスタルなのかについては何も書けなかったという。それは彼らが趣味の悪いイナカ者であること、「遅れてる」ことを病的なまでに恐れているからだ。有名ブランドは若者たちのヨロイで、彼らはそれを買うことで必死で不安に耐えている。何か趣味のよいもの、高価なものを買って変身しようとするのだ。しかしそれは成功しない。ブランドは「自分だけのもの」を志向する若者によって買われるが、彼らはそれを手に入れるやいなや裏切られていく。それは本来大量生産のものだからだ。こうして買っても買ってもみたされない心理的飢渇感がつくられていく。その切実さがまったく描けない点で『なんとなく、クリスタル』は広告文の水準を出なかった、というのが津村の結論である。

昨年、これを読んだ時、作品を読んでいなかったのだがナルホドと思った。引用などもあって、

だいたいどんな小説なのかわかるような気がしたのだ。しかし、作品を読んでみて、これでは少し困ると思う、というところを感じる。

実をいえば、ここで津村のいう「主人公たちがなぜクリスタルなのか」という問いに答えようとした小説が、フランスにある。『眠る男』という第二作の訳書によって知られるジョルジュ・ペレックの書いた『事物』という小説だ。（邦訳名『物の時代』白水社刊）

そのエピグラフはイギリス人作家マルカム・ラウリーの『活火山の下』からとられているが、大意は、文明は進み、科学と創造は人間の生活を限りなく豊かにする、しかしこの新しい生活の「クリスタルな」泉も、獣のように苛酷な労働に従事する者たちの渇いた唇には閉ざされたままだ、というのである。（註1）

この小説は、一九六五年に書かれ、フランスの文学新人賞にあたるルノードー賞を得ている。一九五〇年代後半から、六〇年代前半にかけてフランスに現われた巨大な消費社会のなかで、二十歳を少し出た一組の若い男女が、「物」への渇望に身をさいなまれ、少しでも快適（クリスタル）な生活をしたいと思う一方で、また自由な人間でもありたいと願い、社会に組みこまれることを嫌って執行猶予の状態にとどまりながら、少しずつ、少しずつ、「物」に屈伏し、崩れていく。それを、ちょうどボヴァリー夫人の破滅を追っていくフローベールのような眼で、描いている。

これをフランス版『なんとなく、クリスタル』というように、考えてみると、問題はもう少しはっきりするのである。

ここでは問題のありかはきわめてはっきりとしている。それは、「モノ」（商品、物質的幸福、富）か「自由」か、という問いのかたちをとっているからだ。

我々はそのいずれを選ぶか。この巨大な消費社会のなかで我々はどのように「自由」を選ぶことができるのかと、この両親をナチスに殺されたフランスのユダヤ人作家は自問している。

津村の批判の立脚点は、ほぼ、このジョルジュ・ペレックの立つ点に含まれる。この点で津村の先の問いは有効だし、彼は問題のありかを見失っていないということができる。

しかしぼくの感じたことはこの先、といってよいのか、この手前というべきなのか、もう少し『なんとなく、クリスタル』に接近した視角のうちにある。なぜ田中は「主人公たちがなぜクリスタルなのかについては何も書けなかった」のか。即ち、なぜ『なんとなく、クリスタル』には、はじめから「物」か「自由」か、という問いが奪われているのか。

ぼくがこれを読んで感じたのは、主人公の、そして作者の、どうしようもない弱さだった。その弱さは隣りにジョルジュ・ペレックを置き、津村喬を置くと一目瞭然である。

しかし津村の批判は、作者が自分のこのどうしようもない弱さに気づいていない、無自覚であるという仮定から出発している。そのために、その弱さの指摘が批判の終点をなしている。

しかし、田中はその「弱さ」に気づいているのではないか。というより、その自分ないし自分達のどうしようもない弱さの自覚から彼は出発しているのではないか。

たしかにこの小説は、この弱さから出発し、これを一息追い抜いて一瞬ふりかえり、その「顔」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.